



## 鍼灸治療のスタイル② ビワの葉灸

二〇一五年九月号（通巻一四二号）の「鍼灸治療のスタイル①お腹の治療」のなかで、ビワの葉灸については後回の「近況雑感」でとしたので、今回は「ビワの葉灸」について述べよう。

ビワの葉を使った灸療法は古来、日本で行なわれてきたもののようなのである。というのは、中国の灸法の本をいくつか当たってみたが、そこには塩・生姜・ニンニク・附子・胡椒などを使ったさまざまな隔物灸が書かれているものの、ビワの葉は出てこないからである。ビワの葉そのものの性味や薬効については『本草綱目』（李時珍著、明代）など歴代の本草書に詳しく記されているが、それはいずれも内服した場合のそれであって、温灸などの外用としては目に触れることはないようである。

『鍼灸OSAKA』二〇一三年秋季号（二十九卷三号）の「多様な灸からびわの葉灸へ」（猪飼祥夫著）によると、ビワの葉灸の方法には歴史的に二つの系統があったとされる。私が勤めている東京医療福祉専門学校教員養成科の某先生は、そのうちの一つ、生のビワの葉の上に晒し木綿と紙を載せ、その上から棒灸を押し付ける「ビワの葉灸法」を得意とするので、教員養成科の学生は誰でもこの方法を会得している。

『医道の日本』二〇一〇年十一月号（通巻一四三号）の「びわの葉灸の具体例」（深見哲哉著）では、その方法の歴史的経緯を「江戸時代には様々なビワの葉療法が誕生し、棒灸と生のびわの葉を使って体に押し当てていく療法（びわの葉灸）の起源は、栃木県真岡市の長蓮寺にあるとされている。代々門外不出の伝承だったが、昭和四十年代に民間療法として広まった」と述べ、写真入りでその具体的なやり方を詳細に記している。

私自身も昔、いつだったかは定かでないが、檀家信徒の無病長寿を願い、境内にあるビワの葉を火鉢で炙り、身体を撫でさする寺院があると誰かに聞いたことがあるが、このやり方は前述の「多様な灸からびわの葉灸へ」によると、静岡の臨濟宗の寺院・金地院の河野大圭大師が大正から昭和にかけて編み出したものようである。

ビワの葉灸についてネットで検索すると、数多くヒットする。また、『ビワの葉療法の

すべて——難病を癒す医者知らずの家庭療法』『体によく効くビワの葉療法全書——病に克つ・心と体を癒す即効家庭療法』（ともに神谷富雄著、池田書店刊）など、ビワの葉灸を扱った書籍がいくつも存在する。『ビワの葉療法のすべて』では、さまざまなビワの葉療法が紹介されており、また、なにに効くのかを実例をあげながら説明し、なぜ薬効があるのか、その科学的メカニズムを明らかにしている。

私がビワの葉灸を目にしたのは、十年ほど前の浅川ゼミ（東京医療福祉専門学校鍼灸研究科）四期のときである。といっても、そのときはビワの葉の上から棒灸を押し付ける長蓮寺流のビワの葉灸ではなかった（長蓮寺流のやり方は、それから数年経ったゼミのときにゼミ生の一人に披露してもらって、初めて体験した）。

その頃のゼミは基礎科・応用科の二年制で、二年生は三〜四人で一つの班となり、実際の患者さん数人（持病のある在校生）を一年間にわたって各班が輪番の形で治療していた。見立ての弁証部分では私が入って指導するが、治療においてはその班の人たちが、効果があると思われるさまざまな治療法をもち寄って施していた。

あるとき、四期のゼミで、ゼミ生の一人がうつ伏せになった患者さんの背中に小型のドライヤーのようなもの二台を押し付けていた。なにをしているのだろうと思い、質問した

ところ、統合医療を標榜する某病院で販売しているビワの葉灸の器具を使って温灸をしているのだという。電気器具の口の部分にニクロム線（？）のような熱源があり、その先のスポンジにビワの葉のエキスを滲み込ませて皮膚を温めるもので、私も試させてもらったところ、とても心地よい。

そこで、東京中医鍼灸センターでもこのやり方を導入したらどうかと考え、とりあえずその器具を自宅で家族に使っているメンバーから借り受けて、私自身も治療のなかで使ってみた。

しかし、実際に使ってみるといくつか問題があった。一つは器械の価格が数万円程度と比較的高価であること、さらには、小さなペットボトルに入ったビワの葉エキスが数千円と値段が高く、このエキスを頻繁に購入しなければならないこと、それよりも問題なことは、この温灸をしているときは、それに両手が取られてしまつて、刺鍼など他の治療ができなくなつてしまうことであつた。もちろん、「ビワの葉療法」を看板にしているところならば、それもありなのだが、私のように刺鍼治療を主にしている者にとっては、この器械の導入はなかなか難しい相談であつた。

スタッフ会議で皆に相談したところ、自分たちでビワの葉のエキスを作り、独自のビワ